

令和6年度 学校経営報告書

八王子市立檜原小学校

校長 佐藤 栄太郎

I 教育活動の目標と方策についての成果と課題 【】は目標値

「形式的な取組」を見直し、「本質的な取組」を中心とした学校教育へ。

- 1 「学びのかまえ」を育成。号令や命令で動かされるのではなく、自らを律する力の育成
【授業や集会、行事で育成を図っていく。QUテストにおける80%以上の肯定評価へ】

探究力の育成に向けた「やる気」の育成結果として、今年度もQUテスト9項目中の8項目で80%以上の肯定評価となり、前年度の7項目達成よりも上回ることができた。また、そのうち5項目は90%以上の高い評価となった。毎年の課題となる「答えたり発言したりするのは好き」の項目では、肯定評価が61.1%であった。これは昨年度の55.6%から5.5%の増加となり、おとしから見ると10%の改善となった。コロナ禍で取り組みにくかった対話学習にも積極的に取り組み、特色ある教育活動としての「追求のNARAHARA」公開研究会の取組が効果を上げたと考える。今後も校内研究やOJTを通して「考えたくなる課題づくり」や「協同的な活動」などに積極的に取り組み、発言への意欲も高めさせていく。

- 2 本質的な学力の向上(グライダー型人間から、自律走行できる飛行機型人間への育成)市の習得目標を達成し自己肯定感を高める。
【一人一人が前年度平均を超える習得率へ】
「課題追求の授業」による探求力の育成
【各学年が研究授業を実施し、授業改善を図り、学力調査においても前年度越えへ】

今年度も、校内研究を中核とした国語科による探究学習を継続してきた。また、算数科の基礎学力の把握と定着に向けて、学校独自でも基礎問題の100問チャレンジを今年度も実施してきた。

市の学力調査結果の変容(昨年度から3の回分を比較)を見ると、6年生は国語と算数のAB層が増加しており、一定の効果があったと考える(上位からABCDの4層に分かれている)。また、国語でのD層が減少し、底上げも進んでいると考える。5年生では、国語では大きな変化は見られず、算数ではB層が大きく増加し、改善傾向となった。4年生はCD層の割合が高学年より高い結果となった。

上記の結果を基に、今後も学年の実態に応じて基礎基本の徹底を図るとともに、既習事項を活用した学習にも意識的に取り組んでいく。また、今年度取り組んできた児童の実態把握の取組や、探求学習も発展継続できるよう取り組んでいく。

3 豊かな心の育成（公共力を育成し、共生社会人へ）

いじめには「ならぬことはならぬ」の精神。心を耕し、安心して学び合える学校づくり
自らの成長に他者の存在が必要なことを実感させ、自他を大切に感謝へとつながる教育
【未然防止及び組織的な早期対応に努め、引き続き、いじめの重大案件ゼロへ】

いじめの早期発見と早期解決に向けた「教育相談委員会」を実施し始めて3年が経過した。いじめの防止とともに、不登校及び登校渋り、学習や学校生活への意欲向上への取組検討も同時に進めてきた。いじめアンケート調査では、軽微のいじめも見逃さず教職員全員で取り組むことを心掛け、今年度に新たに10件をいじめと認定した。そのうち4件が解消し、6件が経過観察期間となっており、不安等が取れるまで継続見守りとしている。また、昨年度からの継続見守りが7件あり、そのうち5件が解消したため、2件が継続見守り中。合わせて8件を校内全体で継続見守り中である。なお、いじめの重大案件は0件である。

いじめ対応では教育相談委員会及び校内委員会を中核として、早期発見、早期解決に努めていく。不登校対応に向けても、校内委での別室登校などのほか、様々な外部機関と連携をして多様な学びの形態を模索してきている。今後も児童一人一人の実態に応じた取り組みを模索し続けていく。

4 体力・運動能力の向上（生涯体育への目覚め）

遊びを含む体力向上の場を工夫。体力基礎としての走力・柔軟性の育成
【体力調査における走力、柔軟性のスコアを前年度越えへ】

体力調査結果から、学年ごとの差は見られるが、全体として以下の傾向が見られた。体力指標の中心となる20mシャトルランでは、全国平均以上となる学年が多かった。しかしながら、50m走では平均を下回る学年も複数見られた。ボール投げでは、ほとんどの学年で平均以上となり、色々な活動に親しんでいる一つの指標となった。柔軟性を示す上体起こしや長座体前屈では、平均を下回る学年が多く、今後の課題となった。

上記の結果から、毎朝のならスポやスポーツ旬間、連携大学による走り方教室などの取組により、基礎体力の向上が図られたと考えられる。昨年度も50m走の結果からは課題が見られたため、今年度は年間を通して変化を見取る「50m走記録会」を実施し、変容が見られだしている。今回の体力調査は昨年6月実施のため、50m走記録会など、それ以後の取組がどの程度効果があったかを次回の調査結果から判断していく。また、ソフトボール投げでの好成績は、体育科での取組を充実させることはもちろんのこと、コロナ以後、ならスポや休み時間に異学年でもドッジボールを楽しむ姿が見られ、

それがよい影響を与えていると考える。柔軟性の結果からは、日常生活全般で意識的な取組が行われていない状況が考えられる。次年度、柔軟性を短距離走と並ぶ重要課題として位置付け、体育科でさらに意識的に取り組んでいく。また、生涯スポーツの一環としても価値付けていきたい。

5 健康・安全に対する意識の向上

防災、防疫に向け、正しい知識と行動力を育成。実践的な訓練を実施し、対応力を強化【名称を「非常時危機対応訓練」とし、教職員へも予告なし非常時危機対応訓練、複数回実施】

避難訓練を「非常時危機対応訓練」として2年目。今年度は、1学期から1年生以外には児童と教職員を含めて予告なし訓練を実施。想定内容も、より緊張感をもてるものになるよう検討してきた。例えば、地震後に火災が発生する訓練では、出火場所を訓練開始後に近くの教職員に伝え、そこからどのように対応するか担任がその場で判断し、全体の避難行動につなげていく訓練を実施してきた。また、地震時に学級内で起こりえることをカードに記したものを封筒に入れ、ランダムに配布し、その場で対応する「封筒訓練」も実施。訓練後には、中高学年児童が任意で学習用端末から、取組の感想や次回に活かせるようなことをフィードバックできる仕組みも導入してきた。児童からはとても前向きな感想がいくつも寄せられ、それらを基に次の訓練に向けて価値付けていくこともできた。

次年度も命を守る構えを身に付けられるよう、前年踏襲ではなく常に緊張感をもって取り組める訓練を実施していく。

6 特別支援教育の充実と「全員追求の授業」の推進

支援を要する児童への自立活動支援の充実

授業のユニバーサル・デザイン化と「全員追求の授業」の推進

【「全員追求の授業」に向けた支援教室の適正な目標設定と支援実施及び担任との連携】

特別支援教育の充実に向けて、児童と保護者、教職員の連携が欠かすことができない。そのために、まず特別支援教室を利用する児童一人一人の年間目標をいかに設定するかを重視してきた。児童の困り感や、保護者の願い、担任等からの集団内での実態把握、医療など外部機関との助言を基に、具体的な場面を想定した困り感の解消を目指して目標設定してきた。それを基に特別支援教室で小集団指導と個別指導を実施し、児童の実態に応じて、一人一人への自立支援を行ってきた。保護者面談や、学級での授業観察、担任との連携をしながら目標の達成に向けて取り組むことができた。

また、各学級では授業集中がしやすいよう教室環境のユニバーサルデザイン化を推進。さらに授業のユニバーサルデザイン化に向けて、校内研究とも連携して取り組みを進めてきた。特に教材研究や教材解釈を大切にして、学習内容を明確にしてきた。意欲を引き出すために児童の疑問から学習課題をつくることも学校全体で取り組んでき

た。また、一問一答型ではなく、対話を通じた問題解決にも挑戦してきた。そうしたことによる学びの意欲向上は、先に示したQUテストの結果などからも成果を見取ることができたと考える。

7 特色ある教育活動の推進（重点）

『探求学習』を推進する『7つのNARAHARA』を推進

- ① 「追求のNARAHARA」（児童の自律に向けた「追求の授業」の創造）
【国語科の物語文を中核にした「追求の授業」による授業改善の成果を公開研究会として発表】
- ② 「GIGA スクールNARAHARA」（追求学習をサポートする方策づくり）
【オンライン外部講師の活用と活動共有の推進。学校評価で80%以上の肯定評価へ】
- ③ 「NARAHARA GLOBAL GATEWAY」（通称NGG CLILL教育の推進）
【学校独自のCLILL教育であるNGGウィーク等を複数回実施】
- ④ 「ふるさと ならはら パワーアップ学習」（教科横断、異校種・地域連携での探求学習）
【ふるさと檜原・八王子のよさを実感。保幼小中及び、地域の高校・大学との連携】
- ⑤ 「NARAHARA WAY」（地域との連携力を武器に探求学習を推進）
【積極的に地域講師等と連携し、学校評価における80%以上の肯定評価へ】
- ⑥ 「NARAHARA レガシー」（アスリート等に学び、探求力と挑戦力の向上。生涯体育への目覚め）
【集会等で成長のコアマインドを育成。体力向上に向け、早朝運動やスポーツタイムの実施】
- ⑦ 「NARAHARA 未来会議」（児童の学び方改革・教職員の働き方改革）
【委員会を核とした主体的取組の場・児童が校長と語る会・校務改善委員会の実施】
- ⑧ 「NARAHARA 危機対応」（より現実的な危機対応力の育成）
【具体的な危機対応訓練を実施し、自助・共助を実現する「危機対応」訓練の実施】
- ⑨ 「NARAHARA スポーツ」（地域、連携大学と協同での体力向上策）
【日常的にスポーツを楽しむ機会をつくり、生涯スポーツへとつながる取組の実施】
- ⑩ 「NARAHARA ミニマム」（国語・算数の土台学習）
【八王子ミニマムを基に課題を明確にし、意識的な取組を継続実施】
- ⑪ 「NARAHARA 食楽」（学校菜園、学校行事とリンク。頭と心と舌、食を楽しむ）
【「バースデーカレー」「ならはら力飯」や菜園食材の活用、食育メモの充実等を実施】

一人一人の自立に向け、本質的な学びをつくる「全員追求の授業」の創造を目指す。校内研究を中核に、講師等も活用し、「人を浴びて育つ」「本物体験の授業」を推進。そして、地域や保護者との連携も深め、相互に応援し合える学校へ。

① 「追求のNARAHARA」（児童の自律に向けた「追求の授業」の創造）

児童一人一人の自律に向け、「本物体験の学習」として「NARAHARA イレブン」に取り組んできた。その中核として「追求のNARAHARA」公開研究会を実施。これまでに取り組んできた、文学を基にした追求の授業づくりを公開した。ここに至るまでに、1, 2学期に提案授業として4クラスで授業研究を実施し、全員で学んできた。また、公開研究会までに各学級で4回の巡回指導を実施。それぞれが講師

から直接学べる機会をつくることができた。

中核教科である国語では、学習内容が不明確になりやすい傾向があるが、そこを打破し、追求しあう授業づくりを形づくることができた。また、「座学のハレ舞台」として発表の場をつくったことで、運動会や学芸会などと同じように、一つの山を皆で乗り越える経験をし、学校全体で成長しあえる経験をすることができた。

② 「GIGA スクール NARAHARA」(追求学習をサポートする方策づくり)

御家庭の協力のおかげで、学習用端末を日常的に持ち帰りながら学校と家庭で活用を進める体制づくりができています。学校評価で見る I C T活用での肯定評価も 83%と、2年連続で増加し、目標を達成することができた。ドリルパーク(各教科の全単元の学習ができるドリルソフト)は、学期中の利用以外にも、長期休業期間中も活用を奨励してきた。「GIGA スクール NARAHARA」として、オクリンクを活用し課題追求型学習等をサポートする教育活動も実施することができた。今後も、学校全体で活用を推進していく。

③ 「NARAHARA GLOBAL GATEWAY」(通称 NGG CLILL 教育の推進)

通称 NGG として、外国語活動を推進してきた。学年間で外国語及び外国語活動推進担当を決め、教科担任のようにして取り組んできた。小中一貫教育の取組を通して、檜原中学校や陶鎔小の英語科担当者と連携をし、中学校にもスムーズにつながる取り組みを意識してきた。学年に応じて書く活動も適宜入れるなど、話す活動以外のバランスも考えながら実施してきた。特別活動とも連携し、今年度から新規で企画した「たてわりオリエンテーリング」にも外国語活動を取り入れるなど、教育活動全体を通して外国語に触れる場をつくれるよう取り組むことができた。

④ 「ふるさと ならはら パワーアップ学習」(教科横断、異校種・地域連携での探求学習)

我がまち檜原を、一人一人がかげがえのない「ふるさと」として自覚できる取組を目指し、カリキュラム内容を刷新し2年目となった。地域の保育園や幼稚園、中学校、高校、大学との連携も進めてきた。保幼小交流会では、今年度も本校で主催し、連携を深めている2園と合同で実施。市の施策としても進めているスタートカリキュラムを中心に具体的な取組内容を話し合い、連携を深める機会とした。連携中学校とは小中一貫教育として教科指導以外にも、生活指導や特別支援での連携や児童・生徒交流も行うことができた。また、都立八王子北高等学校とも連携をし、今年度も「届けよう服のチカラ」プロジェクトとして、難民支援の取組を今年度も協同実施することができた。さらに、創価大学の陸上部・駅伝部を招いて、3回目となる「走り方教室」を全学年で実施することもできた。また、地域とのつながりも重視し、地域サポーターの力を借りながら、ハピネスファームやハピネスガーデンの活用や、炭焼き体験の

実施をしてきた。

⑤ 「NARAHARA WAY」(地域との連携力を武器に探求学習を推進)

本校は、「地域との連携力」が最大の強みである。それを最大限に生かした取組が「NARAHARA WAY」。東京唯一の養蚕農家の方による蚕の授業や、親子繭玉づくり教室をはじめ、織物職人による話や戦争体験の話、がん闘病をされた方の話、野菜作りや花の栽培サポート、田んぼづくり、不登校支援など、多種多様な分野で本物体験をサポートしていただいた。授業以外でも、炭焼き体験などなかなか経験できない取組も実施することができた。次年度も、取組がさらに広がるよう、地域サポーター等も新たに募集し、取組を進めていく。

また、関係自治体とも連携をして作り上げた、地震時の防災マニュアルを基に防災企画も推進。自治体と教職員合同での防災物品の確認なども実施することができた。

⑥ 「NARAHARA レガシー」(アスリート等に学び、探求力と挑戦力の向上。生涯体育への目覚め)

今年度も、地域で活躍する人や、アスリート等の精神性に学び、それを日々の生活に生かす取組を目指して実施してきた。「人を浴びる教育」として地域の方からの学びを一般化して価値付けたり、校長講話として毎月複数回に渡りアスリート等を紹介し、学校の教育目標と連動する形で具体的なよさを紹介したりしてきた。集会後にも、校長室前に写真や資料を掲示し、啓発を図ってきた。知徳体の教育目標を具体的に示した、「仲間とともに探究する力」「自他を大切に作る力」「七転び八起きの挑戦力」に関連させながら繰り返し話をしていくことで、教育目標がお題目とならず、具体的な取組目標へと転換され、学校生活全体で「NARAHARA レガシー」の学びが生かされたと考える。

⑦ 「NARAHARA 未来会議」(児童の学び方改革・教職員の働き方改革)

児童の主体的な取組意欲を高めさせ、教育活動に取り入れるために「NARAHARA 未来ボックス」を設置して2年目。活用の幅が広がり、前年度比1.3倍の100件以上の提案が児童から寄せられた。それを基に運動会や6年生を送る会の実施内容を検討することもできた。また、「校長先生と語る会」として、6年生有志と体育委員会から始業前のスポーツタイム「ならスポ」のさらなる推進に向けての提案もあった。

教職員の働き方改革もここまでかなり推し進めてきた。さらなるものとして、市の施策と合わせ、必要以上の余剰時間をつくらず、カリキュラムの工夫をし、週27時間の授業時間を新たに設定することとした。子供たちとじっくりと向き合える時間を確保できる取り組みをこれからも進めていく。

⑧ 「NARAHARA 危機対応」(より現実的な危機対応力の育成)

これについては、上述した「5 健康・安全に対する意識の向上」に同じであるが、その取組を特色ある教育活動に格上げし、全体でより意識的に取り組めるようにしたこと自体に意味があると考ええる。

⑨ 「NARAHARAスポーツ」(地域、連携大学と協同での体力向上策)

これについても、上述した「4 体力・運動能力の向上」に同じであるが、「NARAHARA危機対応」と同じく、この取組を特色ある教育活動に格上げし、全体でより意識的に取り組めるようにしたこと自体に意味があると考ええる。

⑩ 「NARAHARAミニマム」(国語・算数の土台学習)

八王子市で上学年に年2回実施する学力テストを活用するとともに、本校独自で昨年同様に、児童一人一人の基本的なつまづきを確認する算数の基本問題学習を実施した。単にできるかどうかだけではなく、処理スピードや正答率も併せて検討してきた。それらを基に、その後の授業づくりを工夫したり、基本の反復練習に取り組んだりし、基礎学力の向上に努めることができた。

⑪ 「NARAHARA食楽」(学校菜園、学校行事とリンク。頭と心と舌、食を楽しむ)

食育の推進による残菜率の低下と、食への関心増加を狙い、生涯に渡って健康に生活する基礎づくりを目指した取組を推進。栄養士を中心とした食育の実施や、給食室での活動を動画にして配信する取組を実施してきた。食べる大切さを考える「もったいない大作戦」や、「おはし名人」などの食育も実施。さらに、本校独自のメニューも開発。開校記念日を祝う「ならはらバースデーカレー」は、45周年記念植樹したたくさんのブルーベリーの果実を使ったメニューで、学校の誕生日を祝いながら皆で味わうことができた。また、がんばる子供たちを応援するメニュー「ならはら力めし」も、子供たちの大人気メニューとなった。これらの取組により、着任当初に残滓率が多い時で30%を超えていたのが、現在では多くても20%を超えるかどうかまで改善。多くは数%から10%程度まで改善することができた。今後も、食を楽しみながら健康づくりを推進していく。